三好徹

Tôru Miyoshi

貴族の娘

La Hija
Noble

貴族の娘

La Hija Noble

三好徹

Tōru Miyoshi

集英社

三好　徹（みよし・とおる）
1931年1月7日東京生まれ。旧制横浜高商卒。読売新聞社に入り記者として活躍。1967年『風塵地帯』にて日本推理作家協会賞、翌年には『聖少女』で第58回直木賞を受賞。主な著書に『戦士たちの休息』『興亡と夢』『閃光の遺産』『戦士の賦』などがある。

貴族の娘（きぞくのむすめ）
1995年2月28日　第1刷発行

著　者　三好　徹（みよし　とおる）
発行者　若菜　正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話　編集部（03）3230-6100
販売部（03）3230-6393
制作部（03）3230-6080
印刷所　中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂
製本所　中央精版印刷株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。
定価はカバーおよび帯に表示してあります。
©1995　Tôru Miyoshi, Printed in Japan
ISBN4-08-774120-6 C0093
乱丁・落丁の本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

貴族の娘◆目次

初夜 7
祖父 19
動乱 36
岐路 56
忍び寄る影 72
戦火 87
母と子 103
愛憎の淵 121
貴志子の恋 141
別れ 160

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

戦火のかなた 179
激流 197
旅立ち 214
異国の空 241
草原の国 260
熱い血 276
革命児 295
故国へ 323
キューバ 341
残照 361
あとがき 380

装丁◆スタジオ・ギブ
装画◆高橋常政

貴族の娘

初夜

1

高台にある伯爵城山家からは、品川の海がよく見えた。母屋に面した芝生の庭から段々畠のように、梅、枇杷、柿、みかんなどが植えられたなだらかな斜面が続き、最後には三本の高い欅がそびえている。そのさきには東海道が走っており、さらにそのさきは鉄道の線路をへだてて海である。沖には通称お台場、幕末のころ外国艦隊の来襲に備えて築かれた砲台跡があり、左の方角は田町、右は品川であった。

母屋の一階の庭に面した洋間の窓からは、それらの光景が一望のもとに見渡せた。洋間に置かれたベッドに身を横たえている老伯爵城山源之助にとっては、すべて縁（ゆかり）の深い土地であり町なみであった。

田町は、彼の生涯の運命を決めた郷党の英雄、あの西郷南洲（なんしゅう）が勝海舟と会談した地である。そのとき十六歳だった源之助は、薩軍小銃八番隊の兵士として、薩摩屋敷の海に面した庭を警備していたのだ。また、品川には街道にそって「廓（くるわ）」と称する一角があって、そこではたらく若い女性は遊女と呼ばれた。源之助が妻のサヨとめぐり逢ったのも、そこだった。サヨは新潟の生れで、源之助と出会う一年前に売られてきたのだった。

そのときから、六十数年の歳月が流れていた。源之助は八十一歳をこえ、迫りくる冬とともに人生の

終りを迎えようとしていた。

考えてみれば、人間の一生とは本当にふしぎなものだ、という気がする。なぜなら、若いころはいつ死んでもおかしくはない日々を送ってきたのだ。

源之助が生れて初めて戦争に参加したのは、文久三年（一八六三年）の七月、彼が十一歳のときだった。七隻のイギリス艦隊が鹿児島湾に現われて、市街を砲撃した。

薩摩藩は全力をあげて戦った。源之助ら少年たちも、海岸に築かれた砲台で、砲弾運びを手伝った。丸い砲弾だった。発射音はものすごかったが、そのわりに飛ばなかった。桜島とこちらの岸との間を航行する敵艦にとどかず、いたずらに海面に水しぶきを立てるばかりだった。

それに比べると、イギリス艦隊の艦砲射撃の威力は凄じかった。かれらは、はじめは砲台が近くにあるとは知らずに錨を下ろしていた。そのため、薩摩の最初の一撃は敵艦に命中して、艦長を倒したが、錨を切っていったん逃れたかれらは、船列を立てなおすと、薩摩藩の旧式砲弾の着弾距離外から、アームストロング砲の猛射を浴びせ、磯の兵器所を粉砕し、町を焼いた。世にいう薩英戦争である。

そのあと、源之助は十五歳のときに藩主島津忠義に率いられて京へ上り、翌年正月、鳥羽伏見の戦に出陣した。同盟した長州藩と合わせて兵力は約三千名、敵の旧幕府軍は五倍の一万五千名だった。多くの仲間が戦死した。源之助は、箱館（現在の函館）で榎本武揚が降伏するまで戦った。その間に敵弾に倒れたとしてもふしぎはなかったし、むしろ生き残ったのが奇跡的だった。

帰還した源之助は、西郷に呼ばれ、

「これからの時代、お国を守るには海軍が大切でごわす。お前は海軍でご奉公せよ」

といわれた。

西郷のいいつけとあっては、一も二もなかった。源之助は築地の海軍操練所に入った。

明治六年（一八七三年）、西郷は参議の職を投げうって、鹿児島へ帰った。陸軍少将の桐野利秋をは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じめ、多くの軍人がそのあとを追った。源之助もその一人だった。勝海舟から金を借りて鹿児島へ戻った。しかし、西郷は源之助に、

「お前は海軍をやめてはならぬ。東京へ戻ってご奉公を続けよ」

と命じた。源之助はほかの仲間といっしょに鹿児島に残りたかった。

「先生、私は……」

「源之助どん、気持はわかるが、これからの海軍は、お前ら若者の肩にかかっちょる事を忘れてはならん」

と西郷は大きな目でじっと見つめた。一度見たら誰もが忘れないといわれた、黒曜石のような目だった。

源之助は東京へ戻った。そして、若い海軍士官として先進国の技術を学ぶために外国へ留学中、西南の役が起こった。

西郷自身がそうであったように、多くの肉親同士が敵味方に分かれて戦った。城山家も例外ではなかった。源之助の叔父は西郷軍に入り、兄は官軍の士官として出征、そして戦死した。外国に留学していなかったら、源之助もどうなっていたか……。

すべては遠い日の出来事である。が、忘却のかなたに消え去ってはいない。源之助が艦隊勤務をつとめ、海軍大臣になり、日露戦争のあとに伯爵の栄誉をうけたときや、天皇の大命によって首相になったときなど、ことあるごとに人生のふしぎさを思わずにいられなかった。いつどこの場面で死を迎えてもおかしくなかったのだ。

彼はおのれの生涯に何の不満も悔いもなかった。息子の源太郎も彼のあとを継いで海軍に入り、いまでは海軍中佐である。

ただ一つ、彼の心残りは、源太郎に男の子がなく、娘ばかりということだった。しかし、それも解消

しようとしていた。十九歳になった長女の貴志子が婿を迎え、この日、結婚披露をするのだ。
そのことで城山家は朝から大賑いだった。

2

貴志子は、英語の家庭教師のミス・メイに手伝ってもらって、純白のウエディング・ドレスの着つけを終った。
「オオ、ビューティフル！」
とミス・メイは胸の前に手を組み合わせ、そのすき透るような青緑色の目を輝かせていった。
貴志子は鏡にうつる自分を眺めながら、きょう結婚するということが何かしら納得できなかった。城山家に入籍し、貴志子の夫になる育男は、貴志子と仲のいいいとこたちの仲間の一人である。卒業を来春にひかえているが、まだ慶応義塾の学生だった。
貴志子は四人姉妹の長女で、子供のころからの遊び友だちのいとこたちは、なぜか男の兄弟ばかりだった。
「互いに半々ならよか按配じゃったが、世ン中はそげなものじゃ」
といつだったか、祖父の源之助が珍しく愚痴めいて呟いたことがあった。しかし、貴志子は、そんなことにこだわらなかった。男と女が愛し合い、子を生み、育て、家族をつくり上げて行く。家名がどっちのものであろうと、どうでもよいのではないか。
いまでこそ城山家は伯爵を賜わり、祖父は海軍および政界の長老として重きをなしている。何か政変があると、新聞記者がどっと押しかけてきて、祖父から情報をとろうとする。現に、前年の昭和七年（一九三二年）五月十五日に犬養首相が暗殺されたときも、新聞記者だけではなく、政治家や海軍出身者がたずねてきたものだった。

後継首相は、源之助の後輩の海軍大将・子爵斎藤実であった。そして、じつは、貴志子と育男の挙式で仲人をつとめるのは、斎藤首相夫妻なのである。

貴志子は決して口に出さなかったが、

（斎藤のおじ様であろうと誰であろうと、わたしは構いはしないのに）

と心の中では思っていた。

祖父が祖母とめぐり逢ったときはどうだったのか。男は戦場でいつ死ぬかわからぬ無名の若者にすぎず、女もまた品川遊廓に身を沈めたいなか娘だった。

これは貴志子の想像だが、おそらく祖父の友人たちは、

「源之助どん、やめた方がよか。ほかにいくらでもよか女子が有ッつろうに」

などといったに違いない。

しかし、祖父は友人たちの言葉を、忠告であるにせよ冷やかしであるにせよ、まったく意に介さなかった。

その祖母が病死したのは、この春だった。年のはじめから寝たきりで、医師の診断は胃ガンだった。源之助は二月の末に、雛祭りを早めて、みんなで写真を撮ろう、といい出した。病人がいつまで生きられるか、不安だったのだ。だが、家族一同は当惑した。祖母にはガンだということを、もちろん知らせていない。

「お医者様は胃カイヨウだから、お薬をきちんといただいていればすぐによくなる、とおっしゃっているわ」

と薬ぎらいの祖母をなだめていた。それなのに、雛祭りを早めて雛段の前に一家が勢揃いをして写真を撮ったりすれば、若いころから人一倍直感の鋭い祖母は、自分の死を前にした最後の記念写真なのだ、と感づくのではあるまいか。

貴志子の母の多津子と叔母の静代が部屋に入ってきていった。多津子は、はじめに、
「お話があるの」
といっただけで、あとはすべて静代が喋った。多津子は途中で、
「ちょっと、おばあ様のようすを見てくるわね」
と席をはずしたきり、静代の話が終るまで戻ってこなかった。もともと、何かややこしい問題のときは、いつもそうだった。
静代の話は、要するに、撮影を不自然ではなくするために、育男と婚約し、その記念に一家揃って写真を撮ることにしたい、という提案だった。
「叔母様、それ、何かおかしくありません?」
と貴志子はややふんぜんとしていった。彼女は、幼いときから祖母を好きではなかった。祖母は、えこひいきの強い性格で、貴志子よりも次女の香代子をむやみにかわいがった。
伯爵家だから、盆暮にはたくさんの到来物がある。大半は祖父あての品物だが、なかには祖母あての高価な白い布地がある。すると祖母は、
「こんなお婆ちゃんには用のないものだから、大切にとっておいて、香代ちゃんがお嫁に行くときにみんなあげようね」
というのである。
貴志子は別に腹が立たなかった。そんな布地が欲しいとも思わなかった。自分には祖父がいるから、それだけで充分だわ、と思っていた。
別のときに、何が原因だったか忘れたが、貴志子は、
「くそ婆、死んじまえ!」
と貴族の娘らしからぬ乱暴な罵言(ばげん)を発したことがあった。多津子は蒼白になった。ところが、祖母は

平然としていた。
「ええよ、ええよ、どうせわたしの方が先にあの世へ行くんだから」
貴志子が二の句をつげずにいると、祖母はこんどは、
「まさか誰かさんがいわせているんじゃないでしょうね」
と多津子をじろりと見て呟いたのである。

3

貴志子は、祖母に悟られないために婚約するなんて、とんでもない話だ、と思った。静代から、
「貴志ちゃんは育男さんがきらいなの？」
と聞かれたが、
「別に好きでもきらいでもありません」
と答えた。それが偽りのない気持だった。
女は嫁に行くのがあたりまえであった。だが、四人の娘がすべて他家へ嫁げば、城山家は絶家になってしまう。それをさけるためには、娘の一人に婿を迎えて名跡を継がせるしかない。
貴志子は、四人のうちの誰が婿を迎えて後継ぎになってもいいではないか、と思っていた。城山家に婿入りした男は伯爵になり、婿を迎えた娘が伯爵夫人になる。
（だからどうだというの？）
と貴志子は思っていた。
意地悪なことをしたりいったりする祖母は、現に伯爵夫人である。伯爵夫人だから偉いということはないのだ。
しかし、貴志子は育男と正式に婚約することを承諾した。静代が、

「おじい様が誰よりも貴志ちゃんに城山家を継いでもらいたがっていらっしゃるのよ。それにおじい様だってもうお年だし、もし曾孫の顔を見ることができたら、思い残すことは何もない、とおっしゃっているわ」

といったのが、いわば決め手になった。

貴志子は、静代にいったように、育男のことを好きでもきらいでもなかった。スポーツマンで、ラグビー部の副主将をしている。貴志子とは兄妹のようないとこたちが仲良くつきあっている男なのだから、女の自分にはわからないよさがあるに違いない。そういう期待もあって、貴志子は承諾したのだった。

二階の十二畳の広間で、病床から体を起こした祖母を源之助が抱きかかえるようにして座り、源太郎・多津子夫妻、貴志子と育男、香代子以下三人の娘が正装して写真を撮ったのは、一月末であった。

その数日後に、源之助がとつぜん発熱して病床の人となり、さらには三月末に祖母が亡くなった。

源之助の病名は前立腺肥大であった。老人病の一つである。医師は、いますぐ命にかかわるような病気ではない、といったが、秋風が品川の海から高台の屋敷に吹きあげてくるころになると、血尿が出はじめた。

親族会議が開かれ、その結論をもって静代が貴志子に、

「あなたが結婚はまださきのことだろう、と考えていることは、わたしたちにもわかっているの。彼はまだ学生さんですものね。でも、おじい様を安心させてあげたいし、それができるのは、あなたしかいないのよ」

といった。

貴志子はさからわなかった。そのことによって源之助の生命の灯が一日でものびるなら、と思ったのだ。

あわただしく日が過ぎ、その日がきた。雲一つない青空をうつして、品川の海はどこまでも青かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com